佐渡西三川砂金山の歴史地理

小 菅 徹 也*
Tetsuya Kosuge

1. 金銀の島佐渡

佐渡では平安中期以来大小さまざまな金銀山が稼がれては廃山となり 再開発されては廃絶されるという歴史を繰り返してきた. この中で唯一 392年前の開発以来今日まで一度の休山もなく稼がれ続けているのは 相川町にある相川金銀山（江戸時代には佐渡銀山 明治以後は佐渡金山か相川鉱山と呼称）のみであり もっとも開山と閉山の歴史を繰り返してきたのが西三川砂金山である.

また 戦国期以来昭和に至るまでの鉱山の所在を島内に訪ねると国仲平野と大佐渡山脈北端部 小佐渡山脈東端部及び西端部を例外として ほぼ全島的に鉱山遺跡が分布し 総数60ヶ所に及ぶ鉱山活動の展開を現地に確認できる（第1図). まさに佐渡は文字どおり金銀の島であったといえる. 江戸時代の旧町村 260中 鉱山の所在を伝えるものは42町村に及び このうちもっとも中心的な鉱山は相川金銀山とその先駆的な銀山である鶴子銀山（佐和田町） 新穂銀山（新穂村）及び西三川砂金山（真野町）であった. これに続くものとして江戸初期以来の大須銀山（真野町） 田切須銀山（真野町） 明治以後相川鉱山の支山として稼働された高千鉱山（江戸時代は入川銀山と呼称）が追加される.

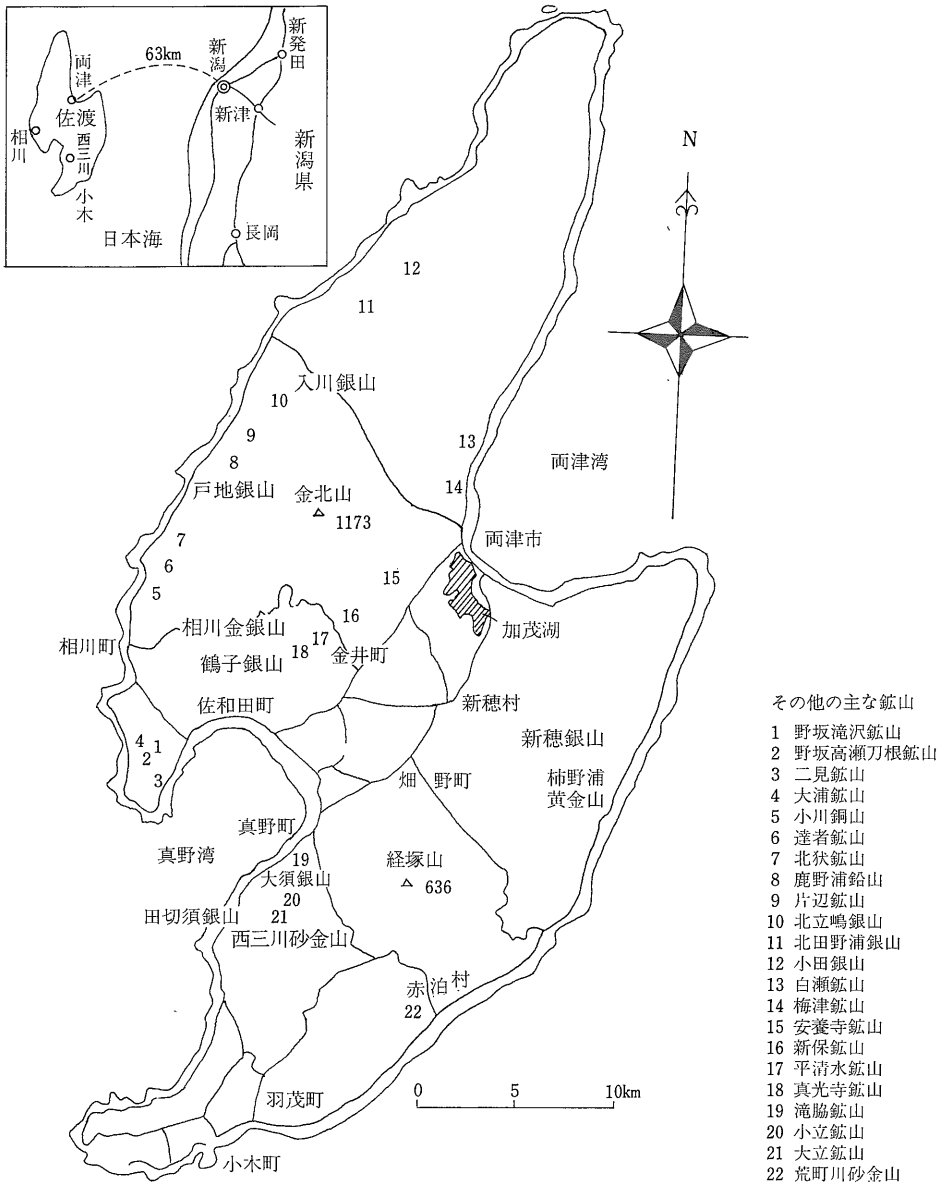
開発順序では 平安中期の西三川砂金山が一番早く寛正元年（1460）ないし 文禄2年（1593）にも再発見されたと考えられる. 戦国期の天文11年（1542）の発見を伝える鶴子銀山がそれに続く. これは天文3年の島根県大森の石見銀山における灰吹法（鉛精錬法）の採用とこの技術が日本海沿岸を北上して佐渡における銀山時代を開幕させたものと位置づけられる. 天正元年（1573）から天正17年（1589）の間に発見 開発されたと思われる新穂銀山； 文禄4年（1595）からの坑道掘りの技術導入による鶴子銀山の第二開発期； これを契機に鶴子銀山の奥山として稼がれた相川山（相川金銀山）の翌文禄5年（＝慶長元年）からの本格的な開発； 慶長5年（1600）以後の相川金銀山を中心とした徳川幕府による銀山開発とその繁栄と続く. 特に幕府の加判 年寄衆（のちの老中）で所務奉行（のちの勘定奉行） 代官頭 一里塚総奉行 諸国金山総代官であった大久保石見守長安による画期的な経営革新と技術革新による慶長期の全盛 続く鎮目市左衛門 竹村九郎右衛門の二人奉行による元和寛永初年の最盛期の現出で 相川を中心とする佐渡の金銀山は 幕府最大の御金蔵となった.

こうした慶長 元和期の金銀の大増産によるゴールドラッシュやシルバーラッシュの時に 西三川砂金山もまた最大の繁栄期を迎え 相川金銀山を稼ぐ山主（山仕＝山師）達が採掘と測量の先端技術をたずさえて続々と西三川砂金山へも入山したのである. しかし こうした空前の大盛況は江戸時代初期の慶長 元和 寛永初年の約30年間に限られたものであり やがて 西三川砂金山も他の金銀山と共にしだいに衰退を余儀なくされたのである.

2. 西三川砂金山の発見

今から870年以前の平安時代末に都で書かれた『今昔物語』巻26に佐渡国で金が採れた話が載っている. この産金説話の内容を要約すると 次のようなことになる。「昔 能登の国司（宇治拾遺物語では治安年間＝1021～1023に能登守となった実房とある）のもとに仕えていた製鉄集団の長の一人が 佐渡の国で金が採れることを知っていて国司の命令で密かに佐渡に渡って20日余りもして千両ほどの金を持ち帰ったが その後 長は姿を消してしまった. おそらく金の出場所を詮索されるのを嫌ったのであろう. それ以来能登の人の間では 黄金が欲しければ佐渡へ掘りに行けばよいと伝えられるようになった」というものである. したがって佐渡での砂金採取の起源は 少なくとも 965年以前に遡れるということになる. 古代から中世にかけての産金がほぼ砂金であることからして 江戸時代を通じて島内唯一の本格的な砂金山として稼行され続けた西三川砂金山（真野町大字西三川字笹川）こそこの説話の舞台であろうと考えられている. しかし 江戸時代の西三川砂金山は 西三川川の上流にある旧笹川拾八枚村を中心としたものであることはよいとしても はたして平安時代からの砂金採取地であるか

* 新潟県立佐渡高校教諭日本鉱業会鉱業史研究会幹事 歴史と地域研究協議会代表. 住所：〒952-12 佐渡郡金井町大字新保乙390



その他の主な鉱山

1 野坂滝沢鉱山
2 野坂高瀬刀根鉱山
3 二見鉱山
4 大浦鉱山
5 小川銅山
6 達者鉱山
7 北狄鉱山
8 鹿野浦鉛山
9 片辺鉱山
10 北立鳴銀山
11 北田野浦銀山
12 小田銀山
13 白瀬鉱山
14 梅津鉱山
15 安養寺鉱山
16 新保鉱山
17 平清水鉱山
18 真光寺鉱山
19 滝脇鉱山
20 小立鉱山
21 大立鉱山
22 荒町川砂金山

第1図　佐渡の主な金銀山位置概念図.
日本鉱山地質学会秋季講習会資料（1987年11月）p. 15 の第1図.　佐渡鉱山位置図をもとに小菅徹也作図（1988年2月).

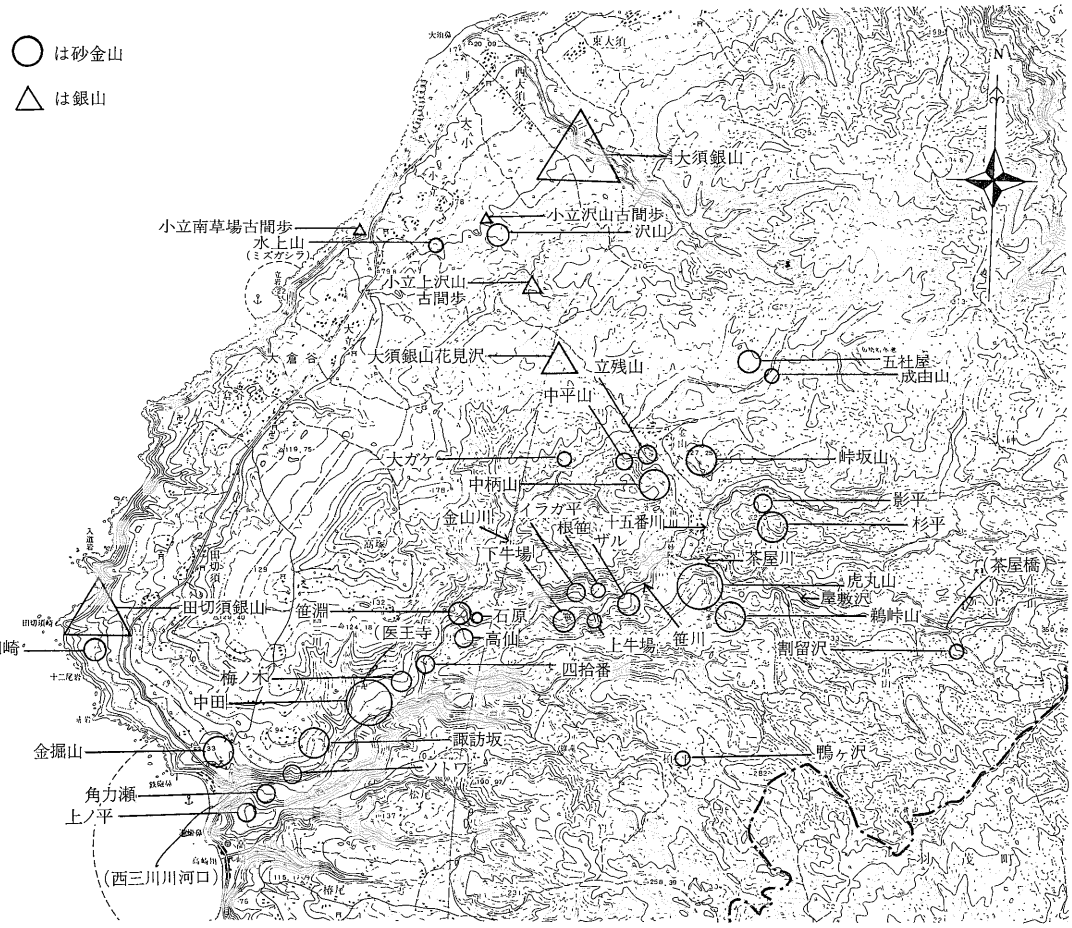
どうかは一応疑って見る必要がある.　なぜならば江戸時代において西三川川の中　下流域の旧西三川村や旧高崎村や旧田切須村などでも砂金山稼ぎがなされているからである.　西三川地域で江戸時代に砂金山として稼がれた産金地を列記すると次の通りである（第2図).

旧笹川拾八枚村（真野町大字西三川字笹川）
立残山（たてのこしやま）　中平山（なかひらやま）　中柄山（なかがらやま）　山居山（さんきょやま）　虎丸山（とらまるやま）　鵜峠山（うとうげやま）
杉平（すぎびら）　影平（かげびら）　峠坂山（とうげざかやま）　五社屋（ごつしや）　成田山（なりよしやま）　大ガケ（おお）　ザル　根笹（ねざさ）　牛場（うしば）　井上ノ沢（いのかみさわ）　十五番川　茶屋川（ちややがわ）

旧西三川村（真野町大字西三川）
金掘山（かねほりやま）　番屋平（ばんやだいら）　ソトワ　諏訪坂（すわんざか）　中田（なかだ）　梅ノ木（うめき）
四拾番（しじゅうばん）　笹淵（ささぶち）　石原（いしわら）　高仙（こうせん）　イラガ平（ひら）　角力瀬（すもうぜ）　西三川河原

旧高崎村（真野町大字西三川字高崎）
上ノ平（うえんたいら）

旧椿尾村（真野町大字椿尾）
鴨ケ沢（かもんそう）



第2図　明治以前西三川地域砂金山　銀山位置図.
(真野町全図により小菅徹也作図　1988年2月).

旧小泊村（羽茂町大字小泊）
長谷地（ながやち）

旧下黒山村（真野町大字下黒山）
割留沢（わりどめざわ）　屋敷沢（やしきざわ）

旧田切須村（真野町大字西三川字田切須）
田ノ崎（たさき）　両開（りょうかい）

旧小立村（真野町大字大小）
沢山（そうやま）　水上山（みずがしらやま）

旧大須村（真野町大字大小）
三貫目沢

このうち笹川村の立残山　中平山　中柄山　山居山　虎丸山　鵜峠山　杉平　影平　峠坂山等は旧笹川拾八枚村（地元では　今は金山（きんざん）笹川とか金山とか笹川といっている）の集落を取り巻く砂金山で　五社屋　成由山　大ガケ　ザル　牛場　根笹などは　その外側に分布する砂金山である.　これに対して井上ノ沢　十五番川　茶屋川などは　谷間の土石を掘り返して砂金を洗い採ったいわゆる川砂金の産地である.　西三川村の場合は　金掘山　番屋平　ソトワ　諏訪坂など　西三川川左岸（明治以前は上流に向かって左右といったので　以下これに準じて記述する）の河岸段丘上と斜面を主な稼ぎ場とするもので　角力瀬は対岸の高崎側の河岸段丘の斜面である.　中田や梅ノ木は医王寺前やその上手の田地で　四拾番は梅ノ木の対岸であり　イラガ平は　笹川の牛場の対岸である.　笹淵　石原は西三川川が笹川と金山川に分岐している合流点でこれに続く笹川右岸の松面の上の斜面が高仙である.　西三川河原というのは医王寺前の字（あざ）おとし盤から土居までの西三川川の中　下流域の川底を掘場とする砂金採取地である.

高崎村の上の平は　西三川河口を望む段丘先端部で川向こうの金掘山と相対している.　椿尾村の鴨ヶ沢は

西三川川の支流の角間川の上流にある字柏ケ平の沢であり　小泊村の長谷地は　鍬形堤と小泊大堤の間の小沢の頭にあった砂金稼ぎ場である．　下黒山村の屋敷沢は笹川上流の茶屋川の一部で茶屋橋までをいう．　茶屋橋のすぐ上の右手の支流が割留沢である．　田切須村の田ノ崎は田切須銀山の樋口沢の右手の海岸段丘上の耕地であり　両開は銀山の沢の河口で　鉱石採掘時のズリ（細かく砕かれた鉱石の残りカスの混じった土砂）を浜川流しをした場所かと思われる．　大須村の三貫目沢というのも銀山の沢の中で残鉱の土砂から砂金を洗い採ったものと考えられる．　これに対して小立村の沢山は　上流に小立堤のある 400～500m 程の出口にある砂金山で　水上山というのは金山線に沿って小立村で一番上の金子八平家の北側のミズガシラという小沢のことらしい．

写真1　五社屋と成由山と青池：金山川の沢の中の杉林の奥に成由山という砂金山と青池があり　左手には五社屋という稼ぎ場がある．

3.　産金説話の舞台

このように西三川地域には　広い範囲に砂金山が分布しているので　この中から古代の産金説話の舞台を捜し出すには　いくつかの手続きが必要になってくる．　一番可能性の強いのは弘治年間（1555～1557）以後　江戸時代を通じて砂金山の主体であった笹川拾八枚村か　西三川河口に来た他国の船乗りが西三川村の備前六左衛門の売りだした葱の根に砂金があることに気がつき　ひそかに砂金を掘り出したという伝承のある西三川村である．そこでこの二村について　能登の鉄掘り集団が残した製鉄遺跡や　古代や中世の村落である「垣の内」や「屋敷の内」（「垣の内」は奈良末から鎌倉時代にかけての農業村落「屋敷の内」は室町期に「垣の内」から独立した開墾村落）があるかどうかを調べてみた．　その結果笹川拾八枚村には「垣の内」も「屋敷の内」もなく　古代に村落があったことを裏付ける須恵器や土師器の破片の一片すら発見することは出来なかった．　また　古代の製鉄炉である穴釜炉の遺構も発見できなかった．　西三川村についても　穴釜炉遺構が発見されなかったのは同様の結果だが西三川河口の砂地には　かつて大量な砂鉄が堆積していたことが確認できたし　左岸には金掘山が存在する．

ところで　砂金山や鉄山では　砂金や砂鉄を掘ることを共に金（かね）を掘るという．　砂金を採取する場合はまず山を崩したり　谷底を掘り返したりして集めた土石の中から大きな石を取り除き　水流で泥や軽い砂礫を押し流して重い鉱物を含む細かな砂を集める．　その後ねこだという藁で編んだ莚を川底に敷いて　これに杓子（しゃくし）という鍬で細かな砂をかけ流し　莚目に砂鉄と砂金を含んださらに細かな砂をとどめる．　更にこれを汰板（ゆりいた）（口絵2参照）という中くぼみの板の上にのせて　水の中で前後左右にゆすりながら砂と砂鉄を水の中にゆり離して砂金だけを採りあげる方法がとられる．　したがって土石の中から砂金が採取される場合には　かならず大量の砂鉄（土地の人はこれを目玉銀といって　これが板の中に残らなければ砂金は採れないといっている）が同時に採取できるのである．佐渡で最初に砂金を掘ったのが　能登の金掘りの長であるといわれる理由もこんなところにあるのではなかろうか．　砂鉄を求めて移動する製鉄集団が　たまたま砂金地帯において砂鉄の中に砂金を発見するのは　決してめずらしいことではなかったはずである．　こんなことを考えると西三川の金掘山は　砂金が稼がれる以前は砂鉄を産出した山であったのではなかろうかという気がしてくるのである．　そのうえ西三川村の段丘上には　九つの「垣の内」村落がある．　しかも　いずれの砂金山もこれらの「垣の内」から近いところに分布しているのである．　こうしたことを考え合わせると『今昔物語』の舞台はどうやら西三川村に落ち着きそうである．

次に問題となるのは　西三川村の内でも段丘上について段丘斜面の金掘山　番屋平　ソトワ　諏訪坂　角力瀬と　西三川川に沿った段丘下に分布する中田　梅ノ木　四拾番　西三川河岸のどちらが古代以来の産金地であったかということである．　段丘上や段丘斜面の砂金山の著しい特徴は　約 4 km も上流から西三川川の水を等高線に沿って導いて河岸段丘の肩の部分と斜面中腹に二筋の水路を引いて　これで砂金を洗い採っていることである．　肩の部分の水路は古江と呼ばれ　これから十間程低い中腹の水路は新田江と呼ばれている．　古江は小布施神社神官の高柳稲葉家の宅地の下を通って　昔は田切須村の田ノ崎まで延びていたという．　これは但馬江ともいわれ　味方但馬の引いた金掘り江であると伝えられ

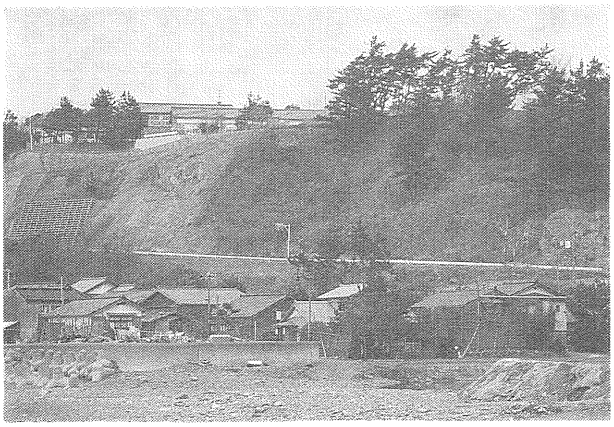


写真2　金掘山：長い年月砂金を稼いだ金掘山の頂上に西三川小学校が新築されたのは　明治13年（1880）のことである．　村中の人が人足となって　おらが村の小学校を建てるために汗にまみれて整地に励んだ．　完成された校舎は立派であったが　雨の日が続くと表土が抜け落ちてグランドに穴があくのには困ったという．

ている．　味方但馬は　家康にお目見えを許された日本的な鉱山経営者で　相川町や京　江戸等にも大きな邸宅を持ち　佐渡金銀山と同時に　摂津国多田銀山（兵庫県）や南部金山（岩手県）をはじめ　各地の鉱山を手広く経営していた大物山主（山師）である．　新田江は　延宝5年（1677）に砂金山の山主和田与右衛門から西三川村の有志が用水権を買い取って　金掘山頂上の西三川小学校裏手の砂金稼ぎ場の跡地を新田に開いたので　以来新田江と呼ばれているが　これも元来は金掘り江である．しかし　このような長距離水路が段丘上に引かれて開田が進んだのは　佐渡では寛永期以後と考えられるから　この水路がなければ砂金を掘ることの出来ない段丘上や中腹の砂金山は　まず平安期の産金地とは考えられない．　したがって古代の産金地は　西三川川河口の横浜橋から600m上流の土居から　さらに400～500m上流の医王寺辺までの河原や中田という田地と安楽寺跡周辺の田地などであったと考えられる．

「昔　安楽寺の住職が村人を集めて田植えをすることになったが　田圃の中に朝日に照らされてキラキラするものがたくさん見えた．　そこで村人が　“方丈さん方丈さんあの気味の悪い物はなんだ”と聞いたら　住職は驚いて　“田植は明日にして光るものを拾ってくれ”といって拾わせたところ　たちまち汁椀で七分目程も砂金がとれた」という伝承がある．　なお　8月になると医王寺前から土居までの約400m間は川の中の水が干上がってしまうことがあるが　こんな時でも土居から下流はいつものように水が流れている．　これは昔　河原の砂金を掘るために川底に樋管を埋めたことによる珍現象といわれている．

写真3　上ノ平と角力瀬：段丘上の平地は　畑地となっているが高崎村の上ノ平という昔の砂金稼ぎ場であり　斜面及び下の河原にかけては西三川村の角力瀬という稼ぎ場であった．

4.　中世の西三川砂金山

鎌倉期における佐渡の砂金山に関する文献や伝承はまったくない．　しかし　記録にないからといって鎌倉期に砂金山がなかったともいい切れない．　中世における砂金山は　金の経済価値や政治情勢の変化によって激しく揺らぎ　しばしば断続的に稼行されるのが特徴である．　前者は国内経済や貿易における金の需要の増減であり　後者は領主間のあるいは領主対一向衆徒（浄土真宗門徒）の金山の経営権をめぐる争乱等による一時的な金山労働者の離散によっておきる稼行の断絶などである．　なお　砂金山は鉱石採掘の金銀山と違って生産額が飛躍的に伸びることがないかわりに　短期間に掘り尽くすこともない．　一度発見されると断続的ながらも長期にわたって稼行される傾向にある．

『今昔物語』の成立した時から約330年も経った室町

時代の永享6年（1434）に足利将軍家によって佐渡に流罪になった世阿弥が「金島集」の中の小謡である北山で「彼の海にこがねの島のあるなるを　その名を問えば佐渡というなり」と記しているのは　単に『今昔物語』中の産金説話にのみもとづいているのではないような気がする．　室町時代から安土桃山時代までの砂金山に関する記事は　いずれも江戸時代後期の編纂になる佐渡史書等に散見される．『相川志』によれば「寛正元年（1460）西三川砂金始まる　その後79年中絶して文禄2年（1593）に再び取り立てる」とある．　これについて『佐渡国誌』や『相川町誌』の著者である岩木拡氏は　文禄2年より79年逆算すると永正11年（1514）であるから　西三川砂金山は寛正元年から永正10年まで稼行したものかといっている．　もちろん　寛正元年も再開発であることはいうまでもない．　さて　この寛正元年開発説を裏付けるような事実がある．　それは　赤泊村莚場本立寺（本龍寺）の開基である釈善性が寛正元年に本願寺八世蓮如上人から裏書をうけた本尊を持ち　文正元年（1466）に河野九門徒の一つである門徒（浄土真宗の信者）を率いて　尾張国幡豆郡（愛知県）から　はるばる来国していることである．　そして　莚場の向太子（むきたし）に寺基を開くのであるが　ここは西三川の砂金地帯へ通じる交通の要所であり　中世において対岸の越後への砂金積出港として利用された可能性を持つ土地であるといわれている．
中世の鉱山稼ぎに　門徒や修験（山伏）に率いられた山の民が多いことは一般的な傾向で　門徒の流入に伴い浄土真宗の僧の活動が砂金山においても活発になったのであろう．　これらのことから　寛正年間における砂金山の開発に尾張門徒が強い関わりを持っていたのではないかと考えられるのである．　次に永正11年断絶に関係のありそうな事実について述べる　永正14年（1517）に越中国伏木勝興寺（富山県）の前身が　檀家離散のために金山笹川から越中に移転したと伝えていることである．これらのことは『越中勝興寺文書』や『雲竜山勝興寺縁起』あるいは『小木町正覚寺縁起』に述べられていることであるが　この話を筋道を立てて整理してみると次のようなことになる．

すなわち「伏木勝興寺や小木町正覚寺の基になる寺は親鸞聖人の弟子である信応上人が順徳上皇の帰依を受けて佐渡国雑太郡竹田村字夏渡り（真野町大字合沢字御堂坂）に開基したもので　のち順徳上皇の第3皇子で信応上人の弟子となった善空房信念上人（彦成親王）が父上皇の菩提を弔ってこの寺に住み　さらに真野の堂所を経て西三川の笹川へ寺基を移した．　そのような理由で笹川には彦成親王と妃と子供の墓（法名院塚）が残ることになった．　しかし　永正14年には兵乱のために門徒が離散したので　寺の荒廃を惜しんだ有志のものが　土山御坊（富山県）に来住中の蓮如上人を訪ねて窮状を訴えた．　そんなわけで御本尊が移されて土山の地に寺が再興された．　その後　高木場　安養寺村を経て　天正9年（1581）伏木の古国府跡に移転して伏木勝興寺として寺運隆盛となった．　その後退転した笹川の阿弥陀堂（寺跡）を手がかりとして成立した正覚寺も　戦国末期の動乱によって笹川から羽茂町字須川へと移り　さらに小木へと再移転した」というものである．　また『正覚寺縁起』には　信応上人の没年は寛元2年（1244）信念上人の没年は弘安9年（1286）と記されている．　すなわち　仁治3年（1242）に順徳上皇が46歳で没したが　その2年後の寛元2年に信応上人が没し　さらに42年後の弘安9年に信念上人が没したことになる．　信応上人の没年前後の著名人の没年齢を列記してみると　藤原定家80歳　藤原家隆80歳　西園寺公経74歳　北条時房66歳　北条泰時60歳などがある．　仮に信応上人が66歳で没したとすれば　上皇21歳の時の子ということになる．　寺または阿弥陀堂が金山笹川に移転した時期については不明であるが　移転の問題を考える場合　ひと気のない山間僻地に突然寺だけが移動して来ることは考えられないので　前提として砂金山が繁栄していることが必要である．　移動が親王存命中ということになれば　鎌倉時代の末にはゴールドラッシュがあったということになる．しかし　現段階ではそれを語る物証がない．　また　その後の砂金山の荒廃と寛正年間の砂金山再開発までの寺の存続の説明が改めて必要になってくる．　したがってここではむしろ親王が没してから174年を経て再び砂金山が開発された寛正元年以降に　上皇や親王とのゆかりを語り伝える人たちによって金山笹川に寺基が移されたと考えるのが妥当ではなかろうか．　人が集まり寺が栄えるにしたがって　これらの人々の手で親王一家の供養塚が虎丸山の近くに築かれるようになったと考えることにしたい．　当時は虎丸山を中心に砂金山が盛り山になっていたものであろう．

次に『佐渡年代記』によれば「弘治年中　松浪遊仁というもの砂金を掘りとることを業とせし事もありといい伝う　景勝領せし頃は　家臣大井田監物　富永備中をして砂金山を司らしめ　出る所の砂金は秀吉に貢すという元来秀吉の下知に依りてなり」として史料1の文書を載せている．　これによれば弘治年間（1555—1557）頃にも能登の松波から来たと思われる松浪遊仁という者が砂金採取をし　天正年間（1573—1591）にも西三川砂金山は稼行され　永正11年以後文禄2年までの間まったく砂金山は稼がれていなかった訳ではないらしい．　そして　このことに関する史料としては　元禄5年（1692）に小立

史料1
秀吉書状

於二佐渡国一在々庄園地頭御家人等輿号構二居城一候由、此度其元発向被レ致一国一城可レ被レ究者也、西三川砂金之儀ハ、任二先例一伏見大坂江可レ被二相納一者也仍而下知如レ件。

天正十七年丑六月　　秀吉

上杉景勝殿

史料2
敦賀七助文書

西三川大須田切須三ケ所金銀山共ニ辰ノ正月十五日より
砂金二十五枚ニ請申候上より水廻しニ付て加増銀子京目
百枚上ケ申候又山盛申付候銀子京目百枚上ケ申候何も惣
山諸役共以上銀合二百枚辰ノ極月までに　以上

慶長九年五月十五日　　つるか
七　助　花押

御奉行様　参

村の諏訪神社が佐渡奉行所に提出した訴状内容とその結果の記録が同社の棟札と共に保存されている．　この由緒書によれば「以前250苅の社領田があったが　138年前に松浪遊仁というものが砂金を掘り出す時に潰してしまった．　そこでこのたびこのことを御公方様（佐渡奉行）に願い出た結果　その代償として毎月砂金山から納まる砂金の内から2匁4分（9g）ずつ下付されることになった」とある．　この諏訪神社が笹川拾八枚村の金山役所のあった井上ノ沢（拾八枚の沢）の左手上の山から小立村に移ったのは寛文年間（1661—1672）であるという．そして　この井上ノ沢の役所前の田地が　問題の潰れ田であった．　また　天正17年（1589）の上杉景勝宛の秀吉文書は　弘治年間以降の佐渡の産金を景勝を通じて吸収しようとする中央政権の意図を明白にしたものといえる．　しかし　西三川砂金山が本格的に稼働し　笹川拾八枚村という現在の金山笹川の集落に連続した砂金山集落を形成したのは　文禄2年と考えられる．

『佐渡国略記』の文禄2年の条によれば「文禄2年3月15日に西三川砂金山が始まる．　今年西三川郷内の百姓が作った葱（ねぎ）を売ったところ　他国の船乗りが根についた砂の中から砂金を発見して　葱と葱畠の土を薬用と偽って買取り　河原に持ち出しては　水の中で砂金を汰り分けて採取した．　やがて村人もわれもわれもと砂金を掘るようになり　のちには毎月18枚も一つの稼ぎ場から運上（営業税）を納めるようになり　村の名前を笹川拾八枚村と名付けるようになった」とある．　ここで一枚というのは10両のことで　金ならば45匁（慶長期は48匁）で　銀ならば43匁である．　同書では　稼ぎ場ごとに毎月白銀（しろがね）18枚ずつの運上とあるが　『撮要年代記』では上納金18枚とある．　『佐渡四民風俗』によれば「享保8年（1723）5月に　佐渡奉行小浜志摩守から　慶長19年の御勘定帳に砂金59枚8両2朱とあるが　そもそも砂金1枚とはどういう事かという質問があり　広間役（佐渡奉行所留守居役）が集まって話し合ったが不明であるので佐渡小判所の後藤座のものに聞いたら　金10両を1枚（大判1枚）と唱えていると返答があった．　したがって砂金も10両を1枚と称したのでしょうと答えた．しからば笹川拾八枚村というのは　昔1ケ年180両で請負ったことによるのであろう」と記述してある．　白銀ならば銀18枚ということになるが　他の砂金山の例からしてこれはやはり砂金18枚の運上と考えるべきであろう．

5.　近世の西三川砂金山

江戸時代の西三川砂金山に関する最も古い文書は　史料2の慶長9年（1604）のつるか七助（ひちすけ）の請負証文である．これによれば七助の請負ったのは　当時の西三川地域における金銀山のすべてであることがわかる．　なお　上からの水廻りによって増し運上をしていることは　その

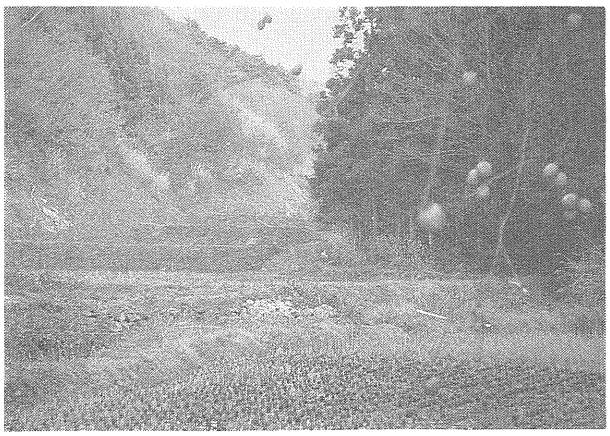


写真4　井ノ上沢：山裾に井戸のよりに大きな湧き水があるので　井ノ上沢と言った．　この沢通りを字十八枚といい　役所の上の沢田が弘治年間松波遊仁が掘り荒した諏訪社の神田（250苅）である．　なお　上流の沢の中を青池からの水路が左から右へと横断している．

鉱山稼ぎの主体が砂金山であることを物語っている．
次に　文書の内容についてさらに検討を加えたいと思う．　つるか七助は越前敦賀港から来た有力な山主で相川金銀山の左沢に七助間歩（坑道）を開いた人である．相川山の経営と平行して　西三川　大須　田切須の金銀山を一括して　慶長9年正月から同年12月までを砂金25枚（大判25枚分の砂金）で請負ったが　その後水路の整備で砂金の増産が可能になったので銀100枚（銀4貫300匁）の増し運上　さらに金銀山が盛況になってきたので銀100枚を追加して　計銀200枚の増し運上をしたいと願い出たものである．　当時は10日ごとに運上を競わせる田中清六の運上入札制から　大久保長安の直山制への過渡期にあたり　運上を納めた稼行期間中といえども脇から増し運上を願うものがあれば　すぐさま運上高の高率な者に稼行権が移動するというきびしい状況下に山主達は置かれていた．　したがって　請負期間中といえども安心は出来ず　盛り山となれば山の状況を見通して自ら税額アップを申告しなければならなかった．　“砂金4.5kgの外に　銀32.25kgも上納しますから約束どおりに年末まで私にやらせて下さい”と云っているのである．
「梅津政景日記」や鎮目書簡を見ると　慶長　元和期の米価は　平均すると金1両で米3石　銀18匁で米1石程の相場である．　これによれば金25枚は米750石（重量112.5トン）で　銀8貫600匁は米478石（重量71.7トン）ということになる（米1石は150kg）．　昭和63年2月現在の標準米の米価は10kgが3,780円であるから　金25枚は時価に換算すると42,525,000円となり　銀200枚は時価27,102,600円に相当することになる．　結局　七助は慶長9年の西三川の金銀山を時価にして年額約7,000万円で請負ったことになる．　なお　御奉行様とあるのは大久保長安のことではなく　長安配下の佐州陣屋（のちの佐渡奉行所）の奉行衆（手代＝代官衆）のことである．

次に慶長11年（1606）から慶長17年（1612）までの大久保長安の駿府家老戸田藤左衛門と佐州陣屋の長安手代の

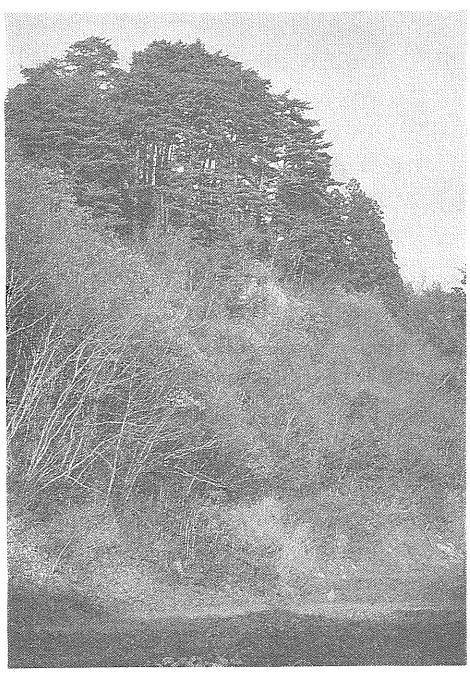


写真5　小立村諏訪神社旧社地：諏訪神社は　井ノ上沢の沢田と金山役所を見おろす山の上にあった．　笹川十八枚村では文祿2年の再開発を契機に村の入口に大山祇神社をまつり砂金山の鎮守とした．　その後全盛期が過ぎると村人は二つの宮の存在を負担に思うようになった．中世的な砂金山の水利の神様が　小立村に貰われて村を離れたのは寛文11年8月のことである．

史料3
川上家文書

（前　欠）
一、大須山山城殿と御談合申参候て見申候節、一段と山姿能御座候、只今ハ志めなとも見ととけ不申候、自然心見ニよこあいの一つも、御渡海以前ニいたし見可申候や御意を奉伺候、とかく新保山ゟハひ出可申と見及申候事
一、大津山我等共参候而、様子見分仕、花見沢ニ大横相壱つ申付候、其外各談合いたしふしん山可仕候事
一、三河谷もゆききへ申候て、金子山さかり可申と奉存候、是も各たんかう（談合）いたし、よき所御座候ハバ可申付候事
一、先書ニ如申候ハハ、大づ山参候て見申所ニ、三川金銀山只今ハ水こをり申候ひ而、しか〳〵と無御座候、大づ銀山花見沢と申所只今さかり申候、無右衛門と申者、其ほか弐口三口鏈あがり申候、是ハいたし様ニゟくわぶんニ能御座候はんかと奉存候、殊ニあら山ニ而御座候間し□もなきていと見及申候事
（後　欠）
一、大須、三河へも山城殿御談合仕山見廻申候、山いろもよく御座候、花見沢鏈不相替上り申候、年内ゟ只今迄ハ金子山ハ水無御座候ゆへ、悪敷御座候が、はや春ニ罷成候間、金子山能御座可有と奉存候、猶参候て無油断様ニ可申付候事

間の書簡及び留書集である川上家文書中から西三川砂金山　大須銀山　田切須銀山についての文書を史料3として紹介したい．　連続する他の文書との関連からこの一連の文書は　慶長12年の暮れから同13年の暮れまでのものと推測できる．　文書の内容を要約すれば次の通りである．

「大久保長安の佐渡駐在代官筆頭の大久保山城や岩下惣太夫が相談をして大須銀山を検分したが　銀山としてかなり有望に思えるので　谷間から地中の鉱脈に向けて直営坑道の一つも試みて見たい．　現在直山（じきやま）稼ぎをしている新穂銀山（新保山）よりは栄えるのではないだろうか．　大津銀山（大須銀山）の花見沢というところに大きな直営坑道を一つ試みた．　その他にも試掘坑をいくつか設けさせた（ここでいう花見沢というのは　小立から金山笹川に行く金山線の途中にある沢で　金山線をはさんで左手には大立堤があり　その反対側の右手の小沢のことである．ここには三箇所に旧坑跡があったらしいが　その中で最も坑内水の豊富な中心坑道が　現在大立の簡易水道の水源として再利用されている．　この坑道が慶長期の大横相（おおよこあい）と考えられる）花見沢の大横相から上鉱がどんどん掘り出さるるようになって　銀山が大いに繁栄するようになった．　また大津銀山の内の普請したばかりの無右衛門間歩をはじめ2・3ヶ所の坑道から鉱石が掘り出されている」というものである．　大須銀山の場合一般に知られているのは三貫目沢の諸坑道である．　現在はおよそ15ほどの旧坑が残っているが　そのうち最も代表的なのが「おたやの敷」という大坑道である．　この坑道は　馬に乗って入坑できたという伝えを持つ大須銀山で最大の坑道であり現在はこの坑内水がパイプで引かれて西大須全戸の水道の水源として利用されている．　伝承によれば　昼3貫目　夜3貫目の金が掘れたということが三貫目沢という名称の起こりであるといわれている．　しかし　西三川砂金山の江戸時代を通じての年間運上高の平均が　多めに見ても1貫目内外であることからして　いかに全盛期といっても一昼夜に6貫目の金が産出したとは急には信じ難いことである．

相川金銀山の慶長期の記録によれば　例えば餅屋平の加賀四兵衛大横相で一昼夜で500荷の出鉱があったとあるが　仮に一荷（鉱石5貫目入りの叺（かます）一つ　すなわち18.75kgの鉱石）に当時の記録で最低の銀20匁（75g）の含有量をかけて計算すると　銀10貫目（37.5kg）という場合があるので　三貫目というのは銀の産出高と考えるべきであろう．　それはともかく大須銀山の場合に　無右衛門間歩以下数間歩というのが花見沢にあるのか　あるいは三貫目沢にあるのかでかなり意味が違ってくる．　もしも三貫目沢であるなら　三貫目沢及びその小沢である「おたやの敷」のあるはんみょう沢や吉ケ沢の諸坑道が花見沢の大横相と同じ頃から稼がれ　大工町という鉱山集落が慶長期に大須村の一番上手（かみて）の高位段丘上に成立したということになる．

一方同文書の砂金山に関する文は「金子山は水がなくて思うように砂金の産出がないけれども　やがて春になって水量が豊富になれば砂金流しも活発になると思われる」そして　これと前後する書状には「三河谷も雪が消えてきたので　金子山も例年通りに砂金産出でにぎわうことであろう．　相役のものと相談の上　よい稼ぎ場は積極的に金掘り共に掘らせようと思う」およそ以上のような内容である．　ここでいう三河谷（みかわたに）や金子山（かねこやま）というのは　西三川川上流の金山川や笹川流域に分布する笹川拾八枚村の砂金山のことである．　三河金銀山というのは慶長9年の七助の請負証文に出てくる西三川　大須　田切須金銀山共という場合と同様に　慶長10年代の西三川地域の砂金山と銀山の総称である．　このように西三川流域の金銀山の開発は　江戸時代のはじめからすでに本格化していることがわかる．　さて　藤井豊丸氏の史料に依れば　慶長13年（1608）の砂金運上高は13枚7両2分であるとなっている．　「佐渡年代記」では慶長18年（1613）の砂金運上高660匁，慶長19年（1614）は2貫872匁8分とある．　同書慶長18年の条に　砂金は4匁8分を1両とするとあるので　いまこれによって計算すると13枚7両2分は660匁ということになる．　したがって慶長期の西三川砂金山の砂金運上は約660匁から良い時には慶長9年の1貫200匁（25枚）　あるいは慶長19年の2貫872匁余りほどという推測が成り立つ．　次の元和年間は　多い年としては元和元年（1615）の4貫108匁8分　元和7年（1621）4貫831匁2分　少ない年でも元和5年（1619）の1貫6匁8分で　平均が2貫匁前後となって大変なゴールドラッシュとなっている（慶長　元和期の砂金運上高が過少評価されているものについては　新知見を加えて　別稿で論述したい）．　次の寛永年間（1624—1643）は　多い場合が700匁余り　少ない年は350匁前後である．　以下　運上高の増減から砂金山の盛衰を考えると宝暦年間（1751—1763）から寛政年間（1789—1800）までは1貫匁程の年が多く　享和年間（1801—1803）頃から著しく低下し　文化　文政年間（1804—1829）では約200匁天保年間（1830—1843）では約100匁前後　安政年間（1854—1859）以後明治初年（1868—1872）までは　ほとんど100匁を割る年が多い状況である．　そしてこうした盛衰の状況は　相川金銀山を主体とする佐渡銀山の全体の傾向とほぼ一致しているのが大きな特徴である．　西三川砂金山の最盛期が　元和7年の4貫800匁余りの上納高で代表されるならば　元和7年の運上銀6,230貫匁余　元和8年の運上銀5,491貫匁余は佐渡銀山の最盛期を示す数字といえよう．　金4貫800匁は米にして3,200石　時価換算で1億8,000万円　銀6,230貫は米で34万6,111石時価換算で　196億2,449万円余ということになる．

金銀山は膨大な経費を投入して莫大な金銀を掘り出すことに成功した．　しかし　地表から比較的採掘しやすい富鉱帯を掘りつくすと　やがて経費の割には産出金銀による儲けが少なくなり　幕府の保護や設備投資が打ち切られて激しく没落することになった．　銀山の没落にくらべれば　砂金山の衰退は幾分速度が遅い．　これは砂金山の稼行形態が銀山と根本的に相違するからである．　初期の銀山では　巨額な設備投資をすれば　投資効率はきわめて高いものがあった．　それに対して砂金山では　比較的少ない資本で経営が維持できる．　そして　いかに豊富な砂金を含む砂礫層が山中にあっても　その膨大な土砂を洗い流して砂金を汰り取る水の制御ができなければ　砂金を掘り尽くすことはできないのである．　しかし　砂金山においても　上流から長距離の水路を開さくし　自然条件を克服して砂金を増産する努力は幾度となく行われた．　「佐渡年代記」によれば「元和元年に佐渡奉行所の役人が　西三川の関場を検分して新関を申しつけた．　西三川の運子（うんこ）という砂金を掘り出す坑道では　1ヶ月に砂金の運上を400匁も山主共が願い出るほどになった」とある．　もしも　これが半年もつづいたら2貫400匁ということになってしまう．　とにかく　新関を設けてズリと土砂で埋まった稼ぎ場を取り明かすごとに　砂金の産出は飛躍的に増加した．　また同書には元和9年西三川砂金山の水路を味方但馬が計画するともあり　「鼠草紙」の中に「寛永12年西三川砂金山支配役人辻藤左衛門　水の利便の計画に工夫を凝らし　砂金採取に大いに効果あり」とあるのもその努力を語る記録である．　そして　この水路の開さく　受堤の設置という砂金山における技術革新に活躍するのが相川に住む銀山の山主達であった．　西三川の砂金山や銀山に出入りした大物山主を列記すれば次の通りである．

慶長7年（1602）	石見　覚左衛門
9年（1604）	敦賀　七助
元和7年（1621）	味方　但馬
8年（1622）	山田　吉左衛門
	渡辺　弥左衛門
	越中　清兵衛
元和9年（1623）	片山　勘兵衛
	永津　次右衛門
明暦3年（1657）	河上　五郎右衛門
承応元年（1652）	片山　勘兵衛
	味方　治助
延宝4年（1676）	和田　与右衛門

このほかに筑後堤というものがあったことからすると

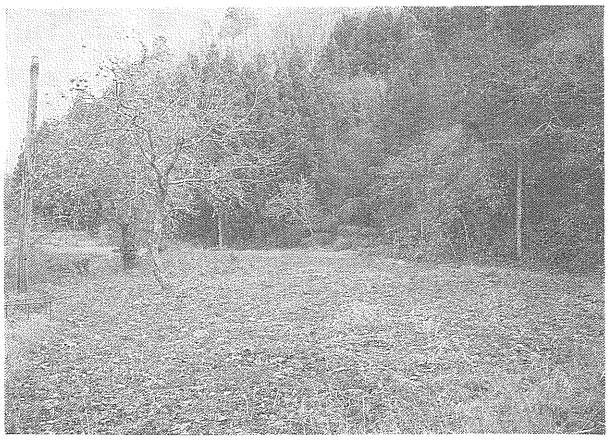


写真6　金山役宅跡：かみのだんさん（旦那様）　あらと（入口）のだんさんといわれた佐渡奉行所派遣の金山役人の役宅跡（265坪）．　閉山後は金子勘三郎家の畑地となっている．

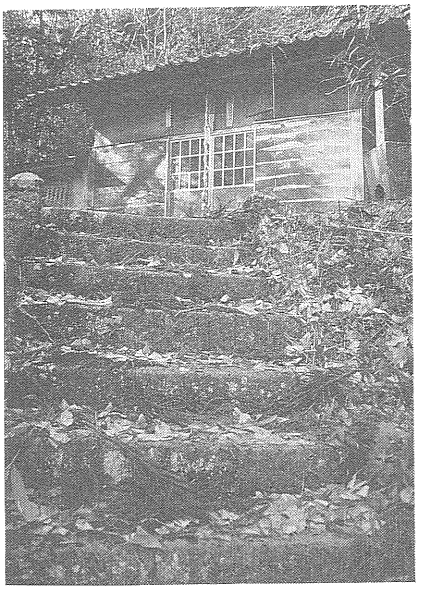


写真7　笹川の阿弥陀堂：荒神山に小木町の正覚寺跡と墓地があることからすると正覚寺の移転後に現地に阿弥陀堂を移築したものか．

記録にはなくとも早川筑後が来ていたことが考えられる．　しかし　さすがの砂金山も中期以後は次第に衰えを見せ　最盛期に約5貫匁に近い上納を誇った砂金山も幕末の元治元年（1864）では　年間40匁余りの運上となっている．　砂金山が廃絶した明治5年（1872）の状況を村の古老は　「村の衆がみんな集まって　金山役所のだんさん（旦那様）の屋敷の土間に手をついて“もう掘れえません　かんねん（勘弁）して下さい”といって金掘りを廃業した．　そらぁ　もつけねぇ（可愛想）もんだたちゅうじゃ」と伝えている．　頑張って見ても請負った分の砂金を掘ることが出来なくなってきたのである．

とっくの昔に銀山の山主や有力な金児達は　砂金山を見捨てて立ち去ってしまっていたのである．　砂金を掘ることで成立した村に　最後までしがみついていた金掘り達が　自らの意志で唯一の生産手段を放棄したのである．　村には　村人の生活を支えるような田畑はない．人々は赤貧の暮しの中で　生きるためにその生活の手だてを藁にすがる様な思いで探し求めた．　笹川の孫次郎が　西三川地方で一番古い炭焼きである惣吉の弟から炭

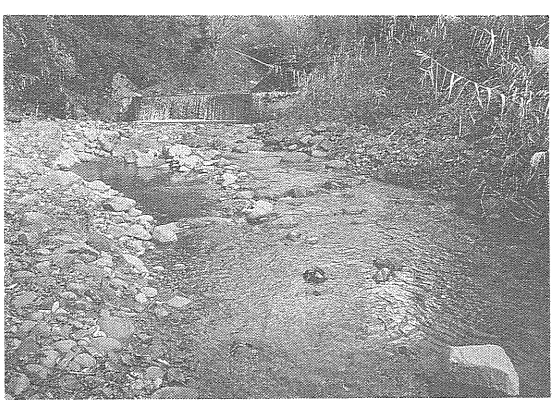


写真8　虎丸山下の体験観光の砂金掘り場：数年前から真野町の体験観光の一貫として砂金流しが行われるようになり　シーズン中は沢の中に人があふれ　人声絶えずという盛況となった．

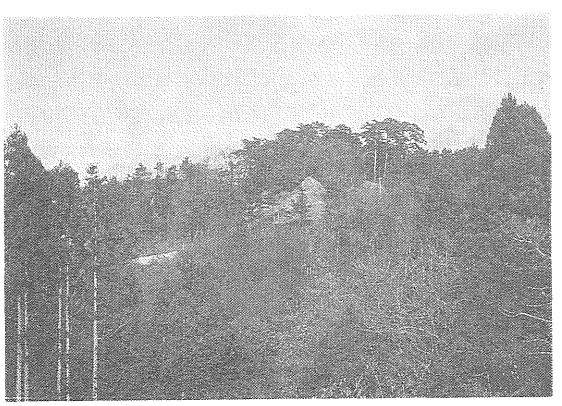


写真9　峠坂：峠坂山の砂金を洗い流すためには　頂上から一気に落下させる多量な水が必要であった．　味方但馬の活躍で6,655間（12km）の水路が経塚山から引かれた．

焼きの技術を伝習したのはこうした時期であった.

まもなく村中が他村の小作をするかたわら　炭焼きをするようになった.　この地方の俗謡に“惣吉弟で　こいつも炭たき　ブウス　ブウス”というのや“一生後家でも金山者はいやだ　何の罰やら色黒だ”“嫁に行くなら金山行くな　末にゃ炭負うて町通い”というのがある.

やがて　爪に灯をともすような暮しの中で　せっせと小金を貯めた村人は　しだいに金山笹川に近い他村の小作田地を買い集めて　百姓への転身に活路を求めたのである.　明治5年に金掘りを廃業した金山笹川の村がはっきりと百姓の村に姿を変えたのは　明治の30年も末の頃であるという.

文　献

本間周敬　西三川村誌　昭和23年12月
真野町教育委員会　真野町史上巻　昭和51年10月
県立佐渡高等学校同窓会　佐渡国略記　昭和61年10月

最近中国で発見された新鉱床　No. 9

岸　本　文　男（地質相談所）

XXXXII　湖北省随州県で一大型重晶石鉱床を確認

湖北省地質鉱産局第8地質大隊は9年間の辛苦を経て湖北省随州県において一つの大型重晶石鉱床を発見・確認した.　その鉱量は1,191万t　鉱石の平均 $BaSO_4$ 含有率は85%を越え　鉱床はカンブリア系下部統最下部の含炭珪質岩系中にあって　その生成タイプは堆積変成—層状鉱床に属している.

呉雪　琼（中国地質報　1987.8.28）

XXXXIII　チベットでベントナイト鉱床を発見

チベット自治区地質鉱産局地熱大隊第3分隊は　当雄県の羊応郷地熱田の熱水変質帯で11点の粘土試料を採取し　地質鉱産部成都地質鉱産研究所X線分光分析研究室に鑑定を依頼し　その結果　同試料がいずれもモンモリロナイトの含有率が高く　ベントナイト鉱であると決定された.

今までのところはベントナイト鉱の発見はチベットとしては初めてのことである.　よく似た変質帯はこの地熱区の処々に存在している.　上記地熱大隊と成都地質鉱産研究所はさらに共同研究を進め，そのベントナイト鉱の稼行価値を明らかにすることとなった.

張登全　葛偉芝（中国地質報　1988.1.1）

XLV　山東省東部で大型滑石鉱床

最近　山東省地質鉱山局第3地質隊は山東省東部において　大型滑石鉱床を探査・確認した.　同鉱床は掖県にあって　鉱石の品位が高く　白度が優れ　国内の製紙紡績　ゴム　陶磁器　塗料などの工業に供することができ　また輸出も可能で　一部の鉱石は彫刻や細工物に使用できる.

吉孟瑞　黄建華（中国地質報　1987.6.26）

XXXXVIII　福建省で大型ウラン鉱床を発見

最近　核工業部の華南地質勘探局の294大隊が福建省北部山岳区の浦城県域内で一つの大型ウラン鉱床を探査試錐で発見した.　これは　福建省で現在発見されている中では初めての大型ウラン鉱床である.

楊鴻　鄭耀鋭（中国地質報　1987.3.20）

XXXXIX　四川省孔隆溝でまた巨大な砂金

7月27日　四川省白玉県孔隆溝で砂金掘り中の群衆が4,719g（9斤4両）の大きな自然金を採取した.　これは昨年の8斤4両の砂金の採取に続くもので　この地でまた特大の自然金が採取されたというわけである.

この孔隆溝の延長約1.5km　幅約300mのそれほど大きくもない高原の谷間からしきりと大きな自然金が掘り出される.　去年だけでも　1斤から8斤4両までの重さの自然金が11個発見されたのである.　今年になってからも　白玉県の砂金採掘は急速に発展しつつあり　6月分だけで国に収めた金の量は去年の総産金量の1/2に近い.

劉経世（中国地質報　1986.8.8）